16年続く商人たちのまつり

私は地元のお祭りがすごく好きです。何年経っても昔の頃に戻ってみんなと話せることが地元ならではの安心や暖かさを感じる、居心地の良い空間だったからです。その中で、今でも記憶に残っているのは迷子のお知らせで名前を呼ばれてしまったことです。なんとも子供らしいいたずらに合い、翌日登校した際にはとてもいじられたことを覚えています。

このような思い出を持つ私が参加したのは、JR市川駅の北口方面にある6つの商店会が協力し、イベントの企画や運営、関わるスタッフの繋がりで開催するおまつり。それこそが10月1日に開催された「市川まつり」です！！今回は市川まつりにスタッフとして参加をさせていただいたので、歴史と運営側から見た市川まつりについて紹介します。

歴史

今回で第16回を迎える市川まつり。この祭りの起源はどのようなものだったのでしょうか。今回は「ふとんの福地」を経営している福地さんにお話を伺いました。

なんとこの方は市川まつりよりさらに昔に遡ること29年前、市川北口祭りと呼ばれる祭りを3つの商店会合同で行っていたそうです。このころから商店会の繋がりを使って祭りを行っていました。

この市川北口祭りを始めたいと思ったきっかけは、当時市川駅の南口方面では市川のふるさと祭りを開催していたから。そこで福地さんは「南に祭りがあって北にないのは寂しい、北には商店街が多いからそれも活かして商人による市川市の祭りをはじめよう。」と言い複数の商店会に声をかけ、3つの商店会が始めたのが市川北口祭りだそうです。

この市川北口祭りが10年間続いた後、3年間の空白の時を経て今の市川まつりが始まりました。これまで30年近くの歴史があり、それらすべてが商人の力のみで担ってきていることにこの6つの商店会のつながりを感じました。

見所

市川まつりの最大の見所はプロの「阿波踊り」と「サンバ」を同時に見ることができる点です。阿波踊りの団体では、「いろは連」と「天水連」の皆様が参加していました。

いろは連は初代連長の言葉である「自分たちに勝負をかけなさい」「いつも1番を目指しなさい」の言葉を胸に女踊り、男踊り、鳴り物と3つに分かれそれぞれに見所をもちます。白をメインとした服装からなめらかで引き込まれる踊りが魅力的でした。女踊りは赤と青、男踊りでは青を衣装の中にあしらいシンプルな鮮やかさが際立って見えました。

天水連は、「天から降る水と阿波踊りさえあれば、他に何もいらない」というほど、全ての連員が情熱をかけているのが特徴です。またアップテンポな音楽に合わせ老若男女問わず白と黒をメインとした服装で全員が踊る姿はまさに圧巻でした。

そして、サンバの松戸セレージャはS1リーグに所属しているチームです。サンバ界でトップクラスの実力を持ちます。ゆったりとしたステップから始まり、動きのキレがすさまじい女性のダンス、後方にはアップテンポを奏でる音楽隊。すべてが色鮮やかで気分の上がるパフォーマンスでした！

日本でこの2つの共演を見ることができる場所はこの市川まつりだけです。

ほかにも5つある会場それぞれでイベントが行われていて、どの時間にどの会場へ行っても楽しむことができました。

内側から見た祭り

今回の祭りを内側から見て、私が強く感じたことが2つあります。それは出店しているひと、演技演奏をしている人などお店を出している人や演奏をしている人などスタッフ全員が「ずっと笑顔で、ほんとうに楽しそうにしていたこと」と、1箱50円で売られているポップコーンや300円で売られているやきそばなどほかのお祭りに比べ「値段が安く買いやすいこと」です。

この背景には、「市川まつりを通して『売り上げ』よりも商店会の人達から参加される皆さんへの『日ごろの感謝』を伝えること」というのがあります。

そのため祭りの雰囲気も穏やかであり、いつも見ている商店会の人が多くいるので、小さなお子さんが1人で来ても安心、安全に参加することができます。夜ではなく日の出ている時間帯で開催しているため子供の参加人数がとても多く、子供用の射的が30分待ちになるほどこの祭りは活気に溢れています。

まとめ

商売よりも「日ごろの感謝」を大切にすることでスタッフ全員が楽しむことができます。その熱でお客様の心をつかみ、8万人を超える人が参加するほどの規模になりました。これこそが、市川まつりでしか味わうことのできない空気感であり、最大の魅力なのだと感じます。

市川まつり参加商店会

市川駅前西通り商店会
市川ビル商店会
真間銀座会
アイアイロード市川商店会
市川三商会
真間駅前通り会